



## イチ押し

アニメや漫画キャラクターにSF作品やゲームの世界観……。大手だけでなく格安の地方航空までもが派手な機体で話題をつくらせている。

4

LCC・中堅もキャラ塗装

# 日経

# MJ

## 10月12日(水曜日)

月/水/金 発行



すずき・ひらく 1978年生まれ。武蔵野美術大学映像学科卒。東京芸術大院修了。「描く」という行為を主題に平面、映像、彫刻など多岐にわたる制作を展開。海外でも個展やグループ展などで多数活躍している。主な作品収蔵先は金沢21世紀美術館（金沢市）や英国のロンドン芸術大学など。

幼い頃から道端で何かをみつけては、拾った。土器のかげらや化石、鉱物などを手に取るたび、どこから来たのか、どうしてここにあるのかを想像して楽しんでいた。

大都会の東京にも「何千年も前のかけらや、自然の息吹があちこちにある」と話す。最新のファッションビルなら、コンクリートの壁などに何億年も前の石が混ざっているかもしれない。アスファルト舗装の下には、山からの湧き水がこんこんと流れているに違いない。

人工と自然、デジタルとアナログ。その境界線は実に曖昧で、身の回りのあらゆるものがつながっているとみる。「宇宙に広がる星座のように自分なりの解釈でつなげたい」。だから無数の点を線でつなぐという、独特のドローイングで表現している。

仏ファッションブランド、アニエスベーの路面店

## 森林羅万象のつながり描く

### 点と線のドローイング

「ルー デュ ジュール」（東京・銀座）では、1階から3階へと続く階段に壁画を描いた。人が階段を上り下りする動作には、リズムが伴う。そのリズムに呼応するような絵を描こうと考えた。

来店客はいわば宝探しをしに来ている。自分に合う良い品はないかとワクワクする気持ち。お気に入りのアイテムに出会った時のワッと華やぐ、うれしい気持ち。そんな心の動きにも合わせたドローイングを目指した。

「自分の作品を残すことは、それが美術館でも商業施設でも変わらない」という。その場所をつぶさに探求し、差し込む光や人の動きや気持ちに呼応する。

いずれ自分の作品は消え、また別の人がそこに作品を残すだろう。「全てはつながり、僕たちは常に曖昧な領域で生きている」

西武渋谷店（東京・渋谷）では展覧会「鈴木ヒラク -Constellations-」が17日まで開催中だ。「漆黒」をテーマに闇と光を表現したドローイングは、全館のビジュアルイメージにもなっている。

（ライター 黒野智子）

